

## 「訪中国を通して考えたこと」

2号車—B班 静岡文化芸術大学 荒木優志

私はもともと中国に対して深い関心を持っており、中国に関心のある学生や中国の学生との交流を目的として今回の訪中国に参加した。残念ながら、現地で体調を崩してしまい、中国の学生と直接交流する機会は得られなかったが、それ以外の体験を通して多くの学びや気づきがあったので、ここに感想を述べたい。

前述したように、私は以前から中国に強い興味を抱いていたが、身近に同じような関心を持つ学生が少なく、少し寂しさを感じていた。そのため、今回の訪中国では中国に関心を持つ日本の学生たちと交流できることを特に楽しみにしていた。実際に参加してみると、中国語にほとんど触れたことのない学生も多く、そうした人たちが現地で何を感じ、どのように心境が変化していくのかを観察するのはとても興味深かった。また、私と同様に中国に強い関心を持つ学生との会話も刺激的で、彼らがどのようなきっかけで興味を持ち始めたのかを聞いたり、私の知らない中国の文化や社会に関する知識を共有してもらったりと、日中友好への思いを身近に感じる機会となった。

訪中国では、上海、山西省、北京の三都市を訪問した。上海や北京は日本人にとって比較的馴染みのある都市だが山西省について、出発前は正直どこにあるのかも分からなかった。そのため、むしろあまり知られていない地域だからこそ独自の魅力や趣があるのではないかと期待していた。

まず上海に到着して感じたのは、その街並みがまるで近未来の都市のようだったということだった。バスガイドの方の話によれば、地価の高い地域ではマンションの一室が20億円もすることがあるという。中国は一人当たりのGDPが低く、一般には発展途上国として語られることが多いが、上海の街にはそのイメージとは異なる豊かさが感じられ、圧倒された。また、夜にクルーズ船に乗った際には、東京などの日本の都市と比べても電力の使用量が多く、街全体が光り輝いていたのが印象的だった。そこからも、上海が外国人観光客からの利益を担っている中心地であることがうかがえた。

さらに、上海の方言についての話も興味深かった。上海には「上海語」と呼ばれる、主に地元の人だけが話す方言があり、さらに市内でも川を境に異なる方言が存在するという。こうした言語の多様性に触れることができたのも、今回の訪問で得られた貴重な体験のひとつである。

山西省では、都会とは違った中国を体感することができた。雲崗石窟では時代劇に出てくるような街並みが広がっていて、ガイドさんから教えてもらった仏教の歴史は興味深かつ

た。それと共に私は中国の歴史に対する見識が浅かったので、もっと知識を増やしてから中国の有名な地に行きたいと感じた。

最後に、訪中団に参加したことによって、中国に関心のある学生と訪中団の中国の方や日本の方など、多くの関わる事ができた。それは私にとって、より良い経験になったと共に、中国語学習のモチベーション維持につながった。また、私は今回の訪中団で体調を崩してしまい、多くの方に迷惑をおかけしました。そんな中、支えてくださった訪中団の運営の方には深く感謝いたします。

「現地に行って初めて分かること」

## 2-B 静岡文化芸術大学 薄葉咲来

私が中国という国に抱いていたイメージは、とても漠然としたものでした。「人口の多い国」「急速に経済成長を遂げた国」「長い歴史を持つ国」といった、ごく一般的なものであり、特に強い関心があったわけでもなければ、否定的な印象を持っていたわけでもありません。ただ「隣国」として認識していただけで、その実態について深く考える機会もありませんでした。大学に入ってから、中国語を学び始め、中国経済に関する講義も受ける中で、次第に「実際の中国を自分の目で見てみたい」と思うようになりました。また、大学には中国からの留学生が在籍しており、彼らと交流を重ねる中で、中国の若者たちがどのように日本を見ているのか、またどのような価値観を持っているのかにも関心が湧いてきました。そうした中で、今回の訪中団に参加することができたのは、非常に貴重な経験でした。

まず私が驚いたのは、中国のあらゆるもののスケールの大きさです。想像以上に広い道路と、高層ビル群、その街並みなどに衝撃を受けました。特に上海の街並みは圧巻で見渡せば、日本ではあまり見られないような、近未来的なデザイン性に富んだビルが立ち並んでおり、中国の成長ぶりを感じさせられました。一方で、山西省を訪れた際には、近代的な都市とは対照的に、中国が誇る歴史と文化の重みを肌で感じることができました。特に印象的だったのが「雲崗石窟」と「平遥古城」です。雲崗石窟は5世紀に造営が始まった石窟寺院で、壮大な仏像群は圧倒的な存在感を放っていました。大きいものは17メートルで小さいものはわずか2センチだそうで、その繊細な技術の結晶が今もこうして残っていることに感動しました。平遥古城では、西周時代の町並みがそのまま保存されており、まるでタイムスリップしたかのような感覚になりました。現在でもその城壁内で人々が生活を送っており、過去と今が共存しているその風景が印象深かったです。

また、今回の訪問を通して最も心に残っているのは、現地の大学生との交流です。山西大学では、日本に強い関心を持つ学生と出会いました。彼らの日本語の上手さや、日本のアニメやゲーム、キャラクターなどへの興味は予想以上で、私たちはすぐに打ち解け、短い時間ではありましたが様々なことを話すことができました。大学内を案内してくれ、日本とは異なるキャンパスライフにも興味を持ちました。案内をしてくれた学生と連絡先を交換し、帰国後の今もメッセージのやり取りを続けています。中国人民大学で出会った学生たちも同様で、彼らの知的好奇心の高さや、積極的に学ぼうとする姿勢が印象的でした。また、中国人民大学にて私たち2号車は、出し物として歌とダンス、太極拳を披露しまし

た。発表前は喜んでくれるか不安でしたが、発表後は大きな拍手と歓声、そして中国人民大学の学生からの「すごい！」といった賞賛の言葉から笑みがこぼれました。彼らも日本の歌を発表してくれ、こうして音楽の力で交流ができることを再確認し、文化や国籍を超えて心が通じ合う感動を実感しました。

この1週間を通して、私の中での中国に対する印象は大きく変わりました。ニュースや授業で取り上げられる中国の話題が、より身近に、そしてリアルに感じられるようになりました。「知っているつもり」でいた中国が、実際には自分の知らない魅力や課題を多く抱えた、奥深い国であることを痛感しました。そして何より、現地の方々が私たちを温かく迎え入れてくれたことに、心から感謝しています。今後は、この経験を糧に、中国語の勉強にさらに励むとともに、私自身が訪日する中国人観光客に対して、同じような「おもてなし」の心を持って接したいと考えるようになりました。言語や文化の違いを越え、心と心をつなぐことの大切さを、私は今回の訪問で学びました。また、1週間を共に過ごした訪中国のメンバーたちからも多くの刺激を受けました。異なるバックグラウンドを持つ仲間たちと交流する中で、自分の視野が広がり、多様な考え方に触れることができました。彼らとの出会いも、今回の訪問で得たかけがえのない財産です。

末筆ながら、今回の貴重な機会を与えてくださった日中友好協会、現地にてあたたかく受け入れてくださった中日友好協会の皆様に深く感謝申し上げます。この訪中国での経験を今後の人生の中で日中友好を築いていく第一歩として大切にしていきたいと思います。

## 「宝物の1週間」

### 2-B 富士大学 大上 柚

訪中の事前段階での私は第二選択語学でも歴史履修者でも無く、中国について知識がほとんど無いと言っていいほどであった。訪中国は、大学の先生の紹介で存在を知り、軽い気持ちで応募した。大学では経済学部にも所属しており、中国の政治体制については一党独裁的な少しマイナスイメージですらあった。また、個人が自分の意見や考えをはっきり伝える印象が強く、日本人の考え方と異なるため少し怖いと思っていた。伝統的な芸術・音楽・食文化などが魅力的であり、好意的なイメージもあった。

訪中後の現在では、中国についての知識が増え、もっと深く知りたいと感じた。今回の日程では初めの黄浦江遊覧が第一印象となった。西洋風の歴史的建築と近未来的な高層ビルが一望でき、「古き良き時代と現代中国の融合」を肌で感じられた。訪中国のみでのクルーズだったため見たい景色を存分に楽しめる環境であったことにとても感謝している。また、博物館や華嚴寺・平遥古城では中国の歴史を知ることが出来た。歴史深い国とは知っていたが、目の前にしてその形に残っている意味や過程を知り、とても感銘を受けた。教科書やSNSで見たものが目の前にあって、観光地なのに当時生きていた人の息づかいや庶民の暮らしの1部を体感できた瞬間であった。大学訪問では規模にとっても衝撃を受けた。ひとつの都市と言っていいほど敷地が広く、学生が多かった。その中でガイドしてくれた日本語を勉強している大学生はとても親切で、日本の大学生とお互いに相手の国を想っていることが感じられて、とても素敵な時間が過ごせた。中日青年交歓活動では初めて中国の文化芸術を目の当たりにして、その光景は忘れられないものとなった。違うからこそ面白くもあったが、“似てる”部分も意外と多いと感じた。“国と国”の関係は複雑だけど、“人と人”の関係はシンプルで温かかった。SNSで目にする批判的な情報に流されて、一方的な印象で考えてはならないと改めて思った。中日青年交歓活動に参加して、言語や文化の壁を越えてつながることの大切さを学んだ。違いを知ることによって視野が広がり、共通点を見つけることで心が近づく。この経験を通して、もっとお互いの国を知り、理解し合おうとする気持ちが芽生えた。今後も、日中の架け橋となれるような行動をしたいと思った。

そしてこの訪中で1番の思い出は仲間との出会いである。私は海外に行くことも飛行機に乗ることも初めてで、その上に人見知りの性格でこの一週間を楽しめるのか心配だった。2週間前の事前研修ではあまり打ち解けられず、これからどうなるか気がかりであった。初日飛行機で日本をたつ時、周りに知り合いが一人もいない中であまり話せなかったが、近くにいた程さんに「自信を持って！大丈夫！」と背中を押してもらい、周りと仲良くなるきっかけを与えて貰えたことにとても感謝している。私が所属した2B班はみんな優しく思いやりがあり、目標やなりたい理想の姿に向かって努力する素敵な人格の持ち主だった。私はやりたいことやなりたいものが定まっていなかったので、今回夢に向かって努力する姿を目の前で見て、私もやりたいことを見つけるために1歩動くことから始めよう

と思えた。特に印象に残ったのはホテルでみんなと交流した夜である。みんながどんな人でどんな人生を歩んできてこれからどんな人生を歩むのか、希望を語る姿は輝いて見えた。今回の訪中団に参加できてよかったと心から思う。一週間という短い期間でも、過ごした時間は私の一生の宝物で忘れられないものとなった。

「百聞は一見に如かず」

2-B 明海大学 大久保晴人

「中国語を上達させるとともに、歴史、文化、現代事情などのあらゆる方面を自分の目で見て知見を得る」

私は上記を目標として掲げ、訪中した。大学では中国語を専門に、中国のあらゆることを学んでいる。しかし、日本で教科書を用いて他国の歴史などを学ぶだけでは得られる知識に限界を感じる。

実際に訪中以前の私は、ニュースや SNS によって蓄積された偏見、中国側の歴史とは曲解した知識に包まれていた。

そんな私が、「百聞は一見に如かず」を信じて上海、山西省、北京の三都市を訪れた。

いざ中国に降り立つや否や、驚嘆した。空気は澄み切っており、日本で視た汚染なんて全くないように感じた。さらに都心部の発展度は日本と同等、またはそれ以上であった。AI やあらゆるシステムの自動化、キャッシュレスの普及などあらゆるものに驚かされるばかりであった。上海の外灘で夜景を観覧した際、日本との規模の差を感じた。あれほどまでにすべての高層ビルがライトアップされ、煌びやかなビル景色は日本にはない。中国の技術力はトップであるといっても過言ではないだろう。こんなにも想像していた中国像との間に乖離があると知ったとき、私は心底絶望した。

では中国人はどうであろうか。昨今の日本では、度々中国人の迷惑動画や反日行動などが散見している。これらの偏見を抱えながら交流したとき、またもや驚かされることとなった。私が関わった中国人は、みな人情に溢れており日本に対して友好的な意向を示していた。私が交流をした山西大学と中国人民大学の学生はみな日本語が非常に流暢で、私たちを快く歓迎してくれた。何もかもが日本で見聞きした中国像と違っていた。私の偏見はなくなり、中国に対して今まで以上に肯定的な考えとなった。

中国といえば日本にはない巨大な古代建築物が有名である。私は平遥古城、華嚴寺、万里の長城、雲崗石窟を訪れた。そのどれもが中国 4000 年の歴史を彷彿させる景観や雰囲気であり、私は息を呑むばかりであった。万里の長城は世界的にも非常に有名な建築物であり、もちろん日本の教科書にも載っている。しかし、実物は想像を遥かに超える大きさで、あまりの過酷さに登り切った達成感や景色は感動そのものであった。その他の訪れた観光名所でもその都市の特色や人柄など、実際に体験して初めて知ることのできることはばかりであった。

「百聞は一見に如かず」 日中の友好関係を深めていくためには最重要な事柄であると私は感じた。昨今は SNS の進化に伴い、世界中のどこにいても各国の情報を簡単に手に入れることができる。それ故に、悪い情報も目に留まりやすく結果的に偏見で各国を見ることになる。実際に今の日本と中国のその関係である。現地に赴けば人情深く、快く受け入れてくれる方々ばかりであった。この偏見と現実の乖離を取り除く手段は自分の目で、体で体験することである。これを成し遂げるためには、まず私たち訪中団に参加した若者が先陣を切って行動していくことに他ならないと強く思う。

長くなったが、中国はとても素敵で素晴らしい国だ。一定数の日本人が抱いている偏見とは正反対の良さを持ち合わせている。偏見だけに留まらず、ぜひ実際に行ってみてほしい。行かなければわからない感動が必ず中国にはある。  
非常感谢我有关系的人们。今后我想跟中国人进行交流。



歴史の巨木に触れて：中国で見た未来と人間力

2号車 B班 上智大学 菊池 海

今回、日中友好協会の派遣事業として、私は一週間にわたる中国研修に参加し、上海、山西省、そして北京の三都市を訪れた。これまで中国を本格的に訪れた経験がなかった私にとって、今回の滞在は非常に新鮮で、刺激に満ちた体験となった。

まず何よりも強く印象に残ったのは、中国の都市の先進性とその圧倒的な活気である。私が抱いていた中国のイメージを遥かに超え、街の整備状況や人々のエネルギーに圧倒された。特に上海では、そのインフラ整備のスピードとドローン技術の革新性に目を見張った。都市の上空には多くのドローンが飛行しており、それらは宅配や監視といった多目的で利用されていた。これに対して、日本ではドローンに関する法整備が未だ発展途上であり、中国の技術導入の速さと、それを可能にしている制度の柔軟さ・整備スピードの早さに、大きな驚きとともに学びを得た。

次に、山西省では雲崗石窟や平遥古城といった歴史的建造物を訪れ、中国の歴史の奥深さを肌で感じる事ができた。雲崗石窟では、1500年前の人々が信仰のために、長い年月をかけて巨大な石像を一つひとつ手で彫り進めた痕跡が残されており、その規模と緻密さ、美しさに圧倒された。

平遥古城では、外敵から守るために高い塼に囲まれた中国特有の防御施設「墩台（とんだい）」が設けられており、その内側には独自のコミュニティが築かれていた。木造の伝統家屋や当時の道路がそのまま残されており、まるでタイムスリップしたかのような感覚に包まれた。その中で暮らしていた人々の生活に思いを馳せながら、当時の社会構造や人々の価値観、知恵の積み重ねを肌で感じる事ができた。中国初の銀行である日昇昌の見学施設を訪れ、帳簿の保管方法や手形の複雑な書式、不正を防ぐための多層的な仕組み、さらには隠れ金庫の設計など、当時の金融業における高度な工夫と先見性に驚かされた。加えて、科学博物館を見学し、隋代から清代まで約1300年にわたり行われた科挙について理解を深める事ができた。学問がいかに人々の人生を左右していたかを痛感すると同時に、それが中国文化における教育重視の精神へとつながっていることを理解する貴重な機会となった。

そして何より、今回の訪問で最も心を打たれたのは、中国の人々の温かさと懐の深さである。私が都市から農村部へと移動する途中、急遽お手洗いをお借りすることになった際、現地の村の方は快く迎え入れてくださり、笑顔で送り出してくださいました。その親切な対応は、言葉を超えて心に残るものだった。さらに、山西大学や中国人民大学を訪問した

際には、多くの学生たちと交流の機会を得た。彼らのまなざしは真剣で、「いつかは日中の架け橋になりたい」と、母語でもない日本語をたった3年間で習得しようとする姿勢に、私たちも大いに鼓舞された。

今回の中国訪問で得た最大の学びは、「中国のリアルな今」を自分の目で見ることができたという点にある。メディアや書籍を通じて得られる知識では決して見えない、現地の人々の熱意や意識の高さ、社会全体のスピード感を実感した。ドローンやスマートシティに代表される先進技術の実装、法制度の柔軟な整備、高密度に配置された街路樹の存在など、そして歴史を守り現代に伝える姿勢すべてが中国の現在地を示していた。「ローマは1日にしてならず」というが中国は、時を超えてなお成長し続ける歴史の巨木である。この一週間を通じて、私の中での中国に対する印象は180度変わったと言っても過言ではない。そして、こうした貴重な学びの機会を与えてくださった中国政府ならびに関係者の皆様に、心より感謝申し上げたい。

「『知ろうとする心』がつなぐもの」

2B 日本大学 佐野花

今回の研修で私が得た最も大きな学びは、「他者との関わり方」に対する自分自身の考え方が大きく変化したことです。この1週間の旅を通して、私は多くの人々と出会い、交流する機会に恵まれました。その中で実感したのは、「知ろうとする姿勢」や「受け入れようとする心」が、人とのつながりを築くうえでいかに大切かということでした。

研修では、国境を越えた出会いだけでなく、日本各地から参加した学生たちとも深く関わることができました。日本人同士であっても、出身地や大学、生活習慣が違えば、言葉遣いや物事の捉え方に違いがあることを改めて実感しました。当初の私は、「自分の経験になればそれで十分」と、やや受け身な姿勢で参加していました。しかし、出会った仲間たちの寛容さや温かさに触れるうちに、「自分を知ってもらおうとすること」「相手を知ろうとすること」の大切さに気づかされました。

現地では、ガイドの方々、山西大学や人民大学の学生、ホテルやレストランのスタッフなど、さまざまな立場の方々と接しました。私は中国語を話せませんでしたが、言葉を超えて通じ合う瞬間が何度もありました。互いを理解しようとする姿勢があれば、心はきちんと届くのだということを、肌で感じる日々でした。

正直に言えば、渡航前の私は中国に対してどこかネガティブなイメージを抱いていました。メディアを通して目にする「反日感情」や否定的な報道に影響されていたのだと思います。しかし、実際に現地で出会った人々の優しさや誠実さに触れ、そのイメージは見事に覆されました。もちろん、今回の滞在で見たのは中国のほんの一部分に過ぎませんが、それでも、「すべての人が日本に否定的な感情を抱いているわけではない」という事実を、自分の目で確かめることができました。この出会いに、心から感謝しています。そして、「知らなかった」「知ろうとしてこなかった」ことの罪深さを、これほど強く感じたことはありませんでした。

また、今回の体験を周囲に話した際には、「なぜ中国に行くの？」という否定的な反応や心配の声もありました。そのもどかしさこそが、私がこの経験を伝えていく意義を感じる理由の一つです。自分の目で確かめられない人にこそ、「知ろうとする努力」の大切さを伝えていきたい。それが、今回の経験を自分の中だけで終わらせず、社会につなげていくための第一歩だと考えています。

文化や習慣に対する感覚も、体験を通して自然と変わっていくことに気づきました。例えば、最初は苦手だったジャスミンティーの味が、今では旅の思い出とともに好きな味へと変わったことも、その象徴的な出来事の一つです。

そして最後に強く感じたのは、「当たり前の違い」は誰にでも、どこの国にも存在するという事実、そしてそれにどう向き合うかが大切だということです。個人同士では友情が生まれる一

方で、国家レベルでは容易に対立関係に陥る。そんな国際社会の脆さと同時に、一人ひとりの小さなつながりが、やがて国家間の信頼へとつながる希望も感じました。

中国と日本が互いに理解と尊重を深めていけるように。今回の研修を通じて得た学びと想いを胸に、私もその一助となれるよう、これからも努力を重ねていきたいと思います。

## 出会いが変えた私の日中観

2B 愛知大学 佐野 侑

私は「日中友好大学生訪中団」の一員として、一週間にわたって中国の上海、山西省、そして北京を訪問しました。このプログラムには、全国から選ばれた82名の日本人大学生が参加しており、出身地も大学も異なる学生たちが一つのチームとなって行動を共にしました。私はこれが二度目の訪中でしたが、今回は観光とは異なる視点から中国を見つめ、現地の人々と深く関わることができたため、新しい発見の連続でした。

訪中中、最も印象に残っているのは、現地の学生たちとの交流です。特に山西大学と中国人民大学の学生との出会いは、私の中に強く刻まれています。彼らは丁寧に大学を案内してくれただけでなく、日本の文化に対する興味や思いも語ってくれました。中には日本語が非常に堪能な学生も多く、会話がとてもスムーズに進んだことにも驚きました。彼らの目の輝きや話し方から、「本当に日本が好きなんだ」という思いがひしひしと伝わってきました。

また、交流会の場では、お互いにお菓子を交換したり、文化に関する発表を行ったりと、国境を越えた心のやりとりができたように感じます。中国の学生たちによる伝統文化や現代社会に関する発表はとても完成度が高く、学びの多い時間でした。一方で、私たち日本人学生も、文化紹介のパフォーマンスを通じて自分たちの国の魅力を伝える努力をしました。

この訪中のもう一つの大きな経験は、パフォーマンス発表に向けた準備と本番でした。私たちは中国の学生たちとの文化交流イベントで、ダンス、太極拳、歌の披露を行いました。現地で限られた時間の中で一生懸命リハーサルを行いました。慣れない振り付けや表現に苦戦しながらも、お互いを励まし合い、力を合わせて一つの舞台をつくり上げる過程で、参加者同士の絆はどんどん深まっていきました。

本番当日、舞台に立ったときの緊張感と達成感は今でも忘れられません。太極拳では、中国文化への敬意を込めて一つ一つの動きを丁寧に演じ、ダンスでは仲間との息の合ったステップに歓声が上がりました。歌では、言葉を超えて心をつなぐことの力強さを感じました。練習の苦労が報われた瞬間でしたし、そこにいたすべての人との一体感が生まれたのを肌で感じました。

そして、今回の訪中で私がもう一つ大きな学びを得たのは、日本人参加者同士の交流からです。夜の自由時間やバスの中で、さまざまな話をする中で、それぞれが将来について真剣に考え、夢や目標を持っていることを知りました。海外で働きたい人、外交官を目指している人、教育や文化の橋渡しになりたい人。普段の大学生活では出会えないような、異なる価値観や志を持った仲間と出会えたことは、私にとって大きな刺激となりました。自分の目標を見つめ直すきっかけにもなり、「私ももっと挑戦しよう」という前向きな気持ちをもらいました。

この経験を通して、私が最も強く感じたのは、「自分の目を見て、肌で感じること」の大切さです。中国に対して抱いていた漠然としたイメージは、現地で出会った人々の温かさや率直な思いに触れることで、大きく変わりました。ニュースやインターネットだけではわからない現実を、自分自身の体験として知ることができたのです。

帰国後、参加した日本人学生たちとは今でも連絡を取り合い、再会を楽しみにしています。たった一週間という短い期間でしたが、共に過ごした時間、共に作り上げた舞台、共に語り合った夜は、かけがえのない思い出です。

日中関係は、時に政治的なニュースで複雑に語られることもありますが、私がこの訪中を通じて確信したのは、人と人とのつながりが何よりも強い架け橋になるということです。一人ひとりの出会いと対話の積み重ねが、未来の日中関係を形作っていくのだと思います。これからも、今回の経験を忘れず、もっと多くの人に中国の魅力や、日中の可能性を伝えていきたいと強く感じています。

「歴史と現在と未来を見つめて、両国のために何ができるか」

2号車B班 東海大学 高山穂七海

私は訪中前と訪中後で中国に対する印象が変化したと考えている。

訪中前の私は中国に対してどこか怖い気持ちを持っていた。昨年、中国で日本人が被害にあう事件が何件か起こった。歴史的な事件でいえば、日中戦争や南京大虐殺など日本と中国は隣国ではあるが、何事もなく平和な関係を構築してきたわけではない。互いに傷つけてきた過去が存在すると考える。その事柄たちは時間的に見れば過去の出来事と思えるかもしれないが、人の心は、時計の秒針の速度とは異なる速度を持つことがあると考える。人から人へと紡がれてきた辛い過去の思いは、遠い過去とは限らない。私たちが学ぶ歴史には人の思いがのせられている。だからこそ、自分が実際に体験していなくとも、時としてひどい憎しみや怒り、反日の感情などが生まれてくるのではないかと考える。中国人の中にはそういった感情を持つ人たちも、もちろんいるだろうと考えていた。

私は、普段大学の中国語サークルや授業、大学にお弁当を売りに来てくれている中国人のお弁当屋さんなど、日常的に中国人に接する機会は多々ある。しかし、彼らは日本にいる中国人である。彼らは、日本のことを好きでいてくれていることが多い。一方で、訪中で出会う中国人は、中国にいる中国人である。そのため、日本に対してどのような印象を持っているか分からなかったため、どこか恐怖を感じていたのかもしれない。

しかし、訪中の中で感じたのは、中国人たちの一生懸命さである。私たちに接してくれた中国人の人々は全員が私たちのために尽くしてくれた。一緒に同行してくれた韓さん、お店の店員さん、ホテルのスタッフの方、交流した学生たち、ツアーガイドさん、全員私たちが困っているときは迷わず手を差し伸べ、私たちに尽くしてくれた。代表で挨拶をしてくれていた学生の言葉を借りるなら、「文化は違えど、言葉は違えど、国は違えど、思いやりの心は同じである」ということを改めて感じた。ろくに中国語も話せない私にも一生懸命対応してくれた中国人の方々にたくさんの感謝の思い出がある。私が訪中中に使った中国語にランキングをつけるならば、3位は「我不会说中文」2位は「厕所在哪里?」、1位は「谢谢」である。この旅行で私は何回ありがとうを言ったかわからない。この訪中で、中国の人々の温かさを感じた。

私は訪中後、これからの日中友好の懸け橋の一部としてできることは何かを考えたとき、私にできることは、偏見ではなく、ありのまま、私が見たものを伝えることだと考える。変に誇張するわけでもなく、ただ自分がしてもらったこと、感じたこと、教えてもらった文化や現実を伝えることだと考える。私は自分の友達にももちろん今回の経験を伝えたいが、自分の世代とは異なる人たちにより知ってほしいと感じた。私の周りにいる大人の人たちは、中国に対して怖いという印象を持っていた。だから私もそう思ってしまうていたのかもしれない。しかし、実際に訪れてみて、私にとって中国は思いやりのあるまじめな国であった。私はそのことを改めて伝えていきたいと考える。また、大人よりも、さ

らに私は、今の小中学生などまだまだ柔軟で若い世代に伝えていきたい。これから彼らが学ぶ先生たちの中には同じように中国に対して恐怖心を持つ先生たちがいるかもしれない。その先生から学ぶ子供たちは中国に対して恐怖心を抱いてしまう可能性がある。しかし、実際に今の中国を見てきた人がどのように感じたのか、私は、今私が見たものを伝えたいと考える。この先何年か経てば、また中国の状況や日中関係は変わってしまうかもしれない。だからこそ、私はまだ劣化していない情報をなるべく早く、ありのままの状態で次の世代にバトンをつないでいきたいと考える。今の私にできる友好の懸け橋はこの程度のことである。だからこそ、傍観者ではなく、懸け橋の一部として機能していきたいと考える。

私はこれから中国人の人々と、思いやりの心を共有する仲間として、互いが干渉しすぎない許せる距離感で接していけたら良いと考える。過去の罪は重く、決して忘れることも逃げることも許されるものではない。しかし、未来の両国にバトンをつなぐ必要がある。過去だけでなく現在を、そして未来を見つめるために歴史は残され、私たちは学んでいく。歴史や交流のつながりを再確認することのできる7日間であった。



## 「知らなかった中国に出会えた一週間」

2-B 信州大学 中谷柚吉

今回大学生訪中国の一員として、一週間にわたり中国を訪問するという貴重な機会をいただきました。中日友好協会の方々をはじめ、現地でお世話になったガイドさん、交流した中国の大学生たちや、街で出会ったお店の方々など、多くの人々が本当に親切で温かく迎えてくださいました。初めての訪中だった私にとって、その一つひとつの出会いが新鮮で、大きな喜びを与えてくれました。

私は大学で中国語や中国について専門的に学んでいるわけではなく、今回の訪問前は、中国という国に対する知識も乏しく、漠然としたイメージしか持っていませんでした。また、報道や SNS などを通じて、正直なところ少なからずネガティブな印象を抱いていた部分もありました。しかし今回、実際に自分の目で見て、現地の人々とふれ合い、直接話す中で、そうした先入観は次第に消えていきました。そして今では、中国という国を以前よりもはるかに身近に、親しみをもって感じられるようになりました。

中国を訪れている間に何度か利用したコンビニでは、ちょっとしたハプニングもありました。セルフレジの使っている際にトラブルがあり、何も分からず右往左往する私たちに対して、その場にいた店員さんが親切に対応してくださいました。言葉の壁があるにもかかわらず気さくに接して下さり、知らない土地での緊張が和らぎました。その出来事は、私の中で中国の人々に対する印象を大きく変えるきっかけの一つとなりました。

また、特に印象に残っている場所の一つが、山西省にある平遥古城です。壮大な城壁や歴史的な建造物には圧倒されましたが、今もそこに約二万人の人々が暮らしているというガイドさんの説明には大きな驚きがありました。観光地であると同時に、現代の生活が息づく場所であり、古と今が共存する空間に好奇心が尽きませんでした。

中日青年友好交流大会では、現地の中国の大学生たちが披露してくれた演舞などの伝統的なパフォーマンスがとても印象的でした。大勢の観客を前に、堂々とした態度で舞台に立ち、途方もない練習を重ねたであろう力強い演技に、圧倒されると同時に深く感動しました。個人的な旅行では体験しにくい貴重な経験ができ、忘れがたい思い出になりました。

現地の大学生たちとの交流も、私の心に深く残っています。中国人民大学の皆さんが日本語の歌を披露してくれた場面では、非常に心動かされました。遠く離れた地で日本のことを学び、関心を持ってくれている中国の学生たちと、国境を越えて笑い合い、言葉を交わし、楽しい時間を共有できたことを大変うれしく思います。

中国での生活は予想以上に過ごしやすく、治安も良く、食事もしやすく、快適な旅をさせていただきました。ガイドさんの話によると、訪問中の食事は日本人向けにアレンジしてくださっていた部分もあるようで、次回訪れる際には、より現地の人々の暮らしに近い味や文化にも触れてみたいと思います。

今回の訪中を通して、「文化や言葉が違ってても、同じように思いやりを持つ“人間”である」というごく当たり前のことを、実感をもって理解することができました。メディアや書物からだけでは決して得られない、生きた経験を通しての気づきは、これからの私の人生にとっても大きな財産になると思います。

一週間という短い時間ではありましたが、中国という国の一端に触れることができ、私にとっては

大きな一歩でした。今後も日中間の相互理解を深めるために、自分にできることを少しずつでも続けていきたいと思います。そして、いつかまた中国を訪れ、今回とは異なる地域や人々との出会いを通じて、さらに多くを学びたいと心から願っています。

「中国の人、歴史、食を好きになる」

2B 横浜市立大学 畑中七美

今回の訪中を経て学んだことは主に3点あります。

1つ目は、中国の方々が親切だと分かったことです。私は今まで、無意識にも中国人に対して少し怖い印象を抱いていました。日本で働く中国人の接客に対して無愛想だと感じたことや、中国人どうしの会話を聞くと、怒鳴りあっているように聞こえたことが、その要因だと思います。しかし、その印象を中国人全体に普遍と考えるのは間違っているとわかりました。特にホテルのスタッフ、3人のガイドの方々、山西大学、中国人民大学、友好協会の方々は、私たち訪中団に対して丁寧な応対をしてくださいました。

日本語を話せる方はもちろん、日本語、英語共に通じない場合には、スマートフォンの翻訳機能を使って懸命にコミュニケーションをとりとしてくださって、上記のような印象は払拭されました。言葉に関しては、「谢谢」、「对不起」と言うのと「不客气」と返してくださることが多く、その度に嬉しさが込み上げ、中国語習得に対するモチベーションも高まりました。実際に中国を訪れ、現地の方々と意思疎通ができた時、中国に対して心理的距離の縮まりを感じました。

2つ目は、高校生の時に習った世界史との関連についてです。訪中の際の個人テーマとして、「世界史で習ったことと現地で見聞したものを紐付けながら観賞・散策を行う」ことを掲げておりました。実際、既習事項をもってあたりを見渡したとき、興味深い発見が多々ありました。

例えば街中にある企業の名前が、株式会社ではなく「有限会社」が多いのは、中国の国家理念と経済制度のあり方を示しているように思いました。

また黄浦江から見た夜景は、高層ビルやネオンサインが煌々と輝き、経済の発展ぶりを目の当たりにしました。夜景を眺め、電気の供給がどのようになっているのか気になると同時に、日本の首都である東京の景色と比べても、上海の発展はそれ以上のものであるように思いました。他にもライトアップされた洋館を見て、ガイドの方に確認したところ、そこは租界のときのものだと分かり、自分の知識と目の前の光景が結びつく楽しさがありました。

電気自動車と電動バイクの普及、及び専用レーンの設置も進んでおり、その点は、日本も見習うべきところなのではないかと思いました。

雲岡石窟で見た仏像には、その大きさと繊細な彫刻に目を見張るばかりで、最終日に登った万里の長城は、それがいかに壮絶なものかを体感しました。今までは写真で見ることしかその姿を確認できませんでしたが、実際に登ってみて、まさに防壁、突破するのがいかに困難であるか、ということがよくわかりました。

今回の訪中では古の中国、今の中国、そのどちらも体感することができました。どれも教科書の写真を見ただけでは得られない、貴重な経験をさせていただきました。

最後に日中友好関係の架け橋として、食の可能性を考えてみたいと思います。1週間のうちにたくさんの中華料理を食べましたが、味付けの好みの傾向は、確かにあると感じました。中国の料理の味付けにおいて「南淡北咸・東甜西辣」の特徴があると耳にしたことがあります。日本人が本場の中華料理を食べる際は、自分にとって好みの味を探す楽しみがあると思います。

また中国人の友人曰く、中国の朝ごはんは「早点」と言い、種類が多く、価格が安いとの事です。今回の訪中では朝ごはんはホテルのビュッフェでしたが、中華に限らず洋食、和食、フルーツも置いてあり、さまざまな食の経験ができました。中国の方々には是非とも「早点」で日本食を味わって頂きたいです。

美味しいものを食べたいという欲求は国籍によらず、人はその味を生み出した地に対して一種の愛着を抱くようになると信じています。食文化に触れ合うことは、草の根レベルでの日中友好関係に貢献するのではないかと考えます。

## 「国境を越える心の交流」

2-B 皇學館大学 藤原 瑤

中国での1週間は、私の世界観を根底から揺さぶる体験だった。

これまで、私はメディアの情報に踊らされ、中国に対し固定観念を抱いていた。これは、多様な情報があふれる現代社会において、情報の真偽を見極め、多角的に捉える力が不足していたためであろう。しかし、日本の文化や歴史に深い関心を持つ中国人留学生との出会いが私の転換点となった。彼女の優しさに触れる中で、現地を訪れ、顔を見合わせて対話することで、偏見や誤解は減らせるのではないかと考えるようになったのだ。その思いが「中国へ行き、自分の目で確かめたい」という思いに火をつけた。本日中友好大学生訪中への参加を決意し、1週間の訪中を終えた今、その考察が確信へと変わったことを肌で感じている。今回の訪中を通して、人との出会いが日中友好、日中関係をより良くする第一歩であるということを強く実感した。現地の大学生や様々な人々との交流は、言語の壁はもちろん、目に見えない心の境界線を確実に縮めてくれた。この「距離が近くなった」という感覚、そしてそれに気づけたことが、私にとって何より大きな収穫だった。これは、単なる友好関係の構築に留まらず、人間としての本能的な繋がりを再確認できた瞬間であった。

インターネットが普及し、情報があふれる社会だからこそ、私たちは意識的に「人」と直接向き合う機会を創り出す必要があるのではないだろうか。メディアが伝える情報や、既存のイメージだけで相手を判断することは、時に大きな誤解や偏見を生む。しかし、実際にその場に足を運び、相手の目を見て、声を聞き、互いの文化や価値観を尊重しながら対話することで、それらの壁は少しずつ取り払われていく。言葉の奥にある感情や、表情の裏にある真意に触れることで、私たちはより深く相手を理解できる。現地の人々と他愛ない会話をしたり、一緒に食事をしたりする中で、彼らが私たちと同じように喜び、悩み、未来を思い描いている等身大の人間であると身をもって実感した。温かい心の交流があった。このような「人との出会い」の積み重ねこそが、国と国との関係性をも動かす大きな力になると、強く信じている。

現在、大学で英語教育を専攻しており、私は、教育という切り口から、日中友好の未来に深く貢献していきたいと願っている。近年、日本の教育現場では、多様な国籍やバックグラウンドを持つ子どもたちが共に学ぶ機会が劇的に増えている。教師として、多様な児童に寄り添い、共に成長していくためには、まず私自身が多文化に対する深い理解と豊かな心を持つ必要があると考えている。本訪中国で得た教科書だけでは決して伝えきれない、生きた知識と経験は、将来、子どもたちに異文化理解の重要性や面白さを伝える上で、かけがえのない財産となるだろう。子どもたちが幼い頃から、国境を越えた「人との出会い」の重要性を学び、異文化に対する好奇心や共感力を育むことは、将来の日中関係、世界の平和と安定に繋がると信じている。教師として子どもたちの成長を見守る教育現場を通じて、日中友好の架け橋となる存在でありたい。

最後に、素晴らしい機会を提供してくださった関係者の皆様、現地で温かく私達を迎えてくださった中国の皆様、そして一週間を共にし、楽しい時間を共有した大学生の仲間たち。共に学び、笑い、語り合った時間は、私にとってかけがえのない宝物である。本訪中をより一層忘れられないものにしてくれた、皆に感謝を伝えたい。

「ありがとう、謝謝。」

「中国にいてみて」

2-B 日本大学 堀口敏幸

七日間という限られた時間の中で、上海、山西、北京という異なる表情を持つ三つの地域を巡る中で、多くの刺激と学びを得た。中国という一つの国の中にも、都市によってここまで文化や人々の雰囲気が異なるのかと、まずその多様性に驚かされた。

上海では、近代的な都市空間と国際色豊かな雰囲気に圧倒された。高層ビル群の中に西洋建築が並び、人々の行き交うスピードも速い。ビジネス都市としての顔が強く、グローバル社会の最前線を見せられたようだった。その一方で、現地の若者との交流では、未来への不安や、社会の急速な変化についての戸惑いも語られ、華やかな表面の裏にある等身大の葛藤に触れたような気がした。

山西では、空気ががらりと変わった。古都としての歴史の重み、伝統文化の深さが印象的だった。平遥古城を歩きながら、数百年前の商人たちの息遣いを想像し、そこに根ざす価値観や生き方に思いを馳せた。現代の便利さに慣れた自分が、どこか時間に追われて生きていることを再認識し、もっと立ち止まること、積み重ねを大事にすることの意味を感じた。

北京では、万里の長城を訪れたときの体験がとりわけ印象的だった。どこまでも続くかのような石の壁が山並みに沿ってうねりながら延びていく姿を目にした瞬間、自分の存在が極めて小さなものに思えた。長い歴史の中で、人々が国を守るために築いたそのスケールと意志の強さに圧倒された。登るにつれて息が切れ、足も重くなったが、のぼったときの達成感は格別で、遠くに広がる景色を見ながら、「努力の先にしか見えない景色がある」ということを実感した。万里の長城は単なる観光地ではなく、歴史と人間の意志の結晶だった。

この旅で得た学びを今後に生かすとするれば、「多様性を理解し、柔軟に受け入れる姿勢」が一つのキーワードになると思う。国や地域ごとに違う常識、価値観の違いを否定せず、まずは観察し、理解する。これがこれからの社会で必要とされる力ではないかと感じた。特に上海で出会った学生とのディスカッションは、自分の意見を持ちながらも他者を尊重する姿勢が印象的で、自分にもその姿勢を取り入れたいと思った。

また、一緒に旅をした仲間たちとの交流も、今回の旅をより豊かなものにしてくれた。異なるバックグラウンドを持つ彼らとの会話は、何気ない雑談の中にも発見があり、互いを知る大切な時間だった。夜遅くまで語り合った日もあり、現地で見聞きしたことを誰かと共有できる喜びと、それを通して深まる関係性のありがたさを実感した。今後の生き方に影響するような考え方も得ることができ団体で中国訪問できたことがとてもよかった。

振り返ってみれば、七日間は短くも濃密な時間だった。移動の疲れや予定の詰まり具合に戸惑うこともあったが、その分、体と心をフルに使って多くのものを吸収した。目で見て、耳で聞いて、心で感じたこの経験は、自分にとって一つの転機だったと言っても過言

ではない。今後、国内外問わず新たな出会いや環境に向き合うとき、この七日間の旅で得た視点を胸に、より広い世界を柔軟に受け止めていきたいと思う。



「日中友好を目指して」

2-B 山梨県立大学 三室萌果

私が今回の訪中国に参加した目的は、中国や日中関係に関心のある同世代の人たちと交流することだった。私は将来、中国語を母語とする学習者の生活支援や語学支援をする日本語教員になることを目指し、中国語や中国文化について積極的に学んでいる。また、過去に2度中国へ訪問した経験があり、中国の先進的な技術だけでなく中国人のあたたかい人柄にも何度もふれており、すでに私の中での中国に関するイメージは多くの日本人が抱いているものとは異なっている部分もあった。しかしいずれも一人での中国訪問だったため、そこでの経験を人と共有できたことはなかった。今回の訪中では日中交流はもちろん、日日交流も積極的におこない、班や号車の枠組みを超えて多くの学生と会話をするように努めた。

3度目の中国訪問とはいえ、上海の豪華さ、北京の歴史の雄大さにはやはり圧倒された。上海のような急速な発展を遂げた大都市は環境問題を無視し、悪影響を及ぼしているのではないかと疑問を持っていたが、高層ビルが聳え立つ街でも目線を下におろすと緑地が多くあったことに驚いた。前回上海を訪れた際は革新的なデザインのビルやきらびやかな夜景に目を奪われ、常に上を見上げていたために気がつくことはできなかったが、視野を広げると多くの気づきがあった。また、山西省を訪れた際、内陸の都市を訪れたのは初めてで田舎の街並みを想像していたが、実際には高層ビルが建ち並んでいる地域もあり建設中のものも多くあったことに驚いた。上海や北京などの直轄市、その他の大都市には劣るとも古い文化や伝統、歴史的建造物を残しながら近代的な発展を進めている風景が印象に残っている。

中国から帰国した後、友人に「中国はどうだった？いい国だった？」という質問を受けたことがある。私には一つの国がいい国なのか判断する知識はないが、ただ「日本と同じように中国にもいい人がたくさんいる」と自信を持って言える。そして、それらの中国の人々との交流を絶えず行うことが、日中友好を築くための一歩になるのだと感じた。最終日、空港へ向かうバスの中で韓さんが放った一言が印象に残っている。「国同士いろいろなことがいるけど人のつながりは簡単には切り離せない」国家間では歴史や領土をめぐる問題を抱えており、イデオロギーの違いもあるが私たち民間の、特に若者の一人の個人としての交流の積み重ねが、日本と中国という大きな枠組みの中での相互理解へと繋がっていくのではないかと考えた。私は日中友好協会・中国政府奨学金の内定をいただいており、9月からの1年留学をひかえている。私は中国人の優しさやあたたかさには何度も触れていながらも、否定的な対日感情を抱いている人だったらどうしようという不安からいまだに「你是哪国人？」と聞かれると緊張してしまう。しかし、1年間中国で生活する中

で確執のある日中関係の現実に向き合いながら、私たちの世代、また次の世代が友好関係を構築していくための対話を続けていきたい。

最後になりますが、日中関係や今後の私の将来について考える大きなきっかけをくださった日中友好協会の方々、現地の職員の方々、一週間共に過ごし様々な刺激をくれた2Bの班員をはじめとする団員の皆様に厚くお礼申し上げます。

「かけがえのない仲間との出会い―北の大地を離れて」

## 2—B 釧路公立大学 山口純輝

はじめに、私は今回、北海道日中友好協会からの推薦により中国を訪れることができました。北海道日中友好協会の方々に、心より感謝申し上げます。

さて、訪中を振り返って私が今強く感じるのは、今後の私自身への期待感と日本を代表して訪中したからこそ、今後の良好な日中関係の構築に貢献していかなければならないという使命感です。まず、私自身への期待感については、今回の訪中の中での日本全国の学生と話すなかで、海外留学や大学院入試、教員採用試験などに挑戦する学生との交流を活発に行うことができ、私も私自身の人生に妥協せず、叶えたい目標に向けて全力で取り組む生き方をしたいという風な思いが芽生え、良い刺激を貰うことができたのです。訪中前の私は中国語の資格を受けるにしても、心のどこかで「自分には勉強しても合格できないのではないか」とやる前から弱気でしたが、訪中後は「自分にも合格できるかもしれない」という前向きな気持ちで物事を進めていけるような気概を自分自身で感じています。続いて、後者の使命感については、中国へ行きたい日本の大学生全員が訪中団として参加できるわけではないという状況の中で、私たちが見てきた景色をより多くの方々へ伝え、現地の学生の想いを汲み取り、今度は逆に中国の学生を日本に呼び込めるような体制を作ること、日中双方の若者の、互いの国に対する理解が深まるのではないかと考えました。

ところで、私個人の訪中団でのテーマは「北海道の魅力を発信するとともに、中国の学生がどのような夢や目標を持ち、どのような学生生活を送っているのかを知ること」でした。現地の学生との交流は、1週間の訪中期間のうち2日間のみでしたが、短い時間だからこそ現地の学生は私たちを厚くもてなして下さいました。特に私は、山西大学の学生との交流が心に残っています。日本語を専攻して1年半日本語を学習したという彼は流暢に日本語を話し、私たちを図書館や食堂へ案内して下さいただけでなくアイスクリームやフランクフルトをご馳走して下さいました。その彼は、これまでに日本を訪れたことはなく、日本へ留学することを強く望んでおり、毎日大学の図書館に籠もって日本語の勉強をしていると話していました。懸命に努力をしている彼の姿勢や眼差しに感銘を受けたと同時に、私の中国語習得への努力がいかに微々たるものであったかを痛感させられました。彼と一緒に回っていた私たち日本人学生は、私が北海道、他2人が東北、東京で暮らす学生だったため、彼がそれぞれの地域に赴いた際には、必ずおもてなしをしようと決意し、彼の日本への留学が叶うよう鼓舞しました。先に述べた訪中団のテーマのうち、北海道の魅力を伝えるための一助として、お土産もその効果があると考えていたため、「白い恋人」と「札幌農学校」を持っていきました。中国では白い恋人が人気だというのは伺っていましたが、やはり多くの学生に喜ばれました。本当はお土産にとどまらず、北海道の豊かな自然や食についても伝えられたらと考えていましたが、またの機会にしようと思います。最後に、今後の私の目標についてですが、まずは HSK 5 級を取得したいと考えています。

この目標を立てた理由は、現在4級を取得していますが、今回の訪中を終えて、より高度な語彙力が求められると感じたためです。そして大学卒業後の近い将来、日本と中国、その他世界中のネットワークを活かした国際物流に携わりたいという目標を叶え、社会人になってからも日中友好の懸け橋として尽力するとともに、世界中の人々の衣食住を支えたいです。北海道日中友好協会をはじめ、日中友好協会、中日友好協会、その他訪中にあたり尽力して下さったすべての方々、本当にありがとうございました。



写真 1. 田子坊にて



写真 2. 万里の長城にて

私はこの訪中団に価値観の変化と実物を見るということを目標に参加した。

まず一つ目の価値観の変化について述べていきたい。日本に住む中で、情報を得る手段については様々あるが、私がよく利用するのは、ネットニュースや SNS、テレビである。主観的な話をする、私が利用しているメディアの多くは反中的なニュースを扱うものが多いように感じる。また一方、中国経済についてはその発展が目覚ましいことを伝えられている。このような状況ではあるが、東アジアという近いところに位置し、互いの主要貿易相手国であり、切っても切り離せない関係である。そのため私の中にある負のイメージを整理して正しく捉えて払拭していきたいと思った。

一日目、上海の夜景や展望台からの見学で発展した経済、その中心を見学することができた。ガイドさんの話からも伺えたようにここ 30 年での発展具合が視覚的に理解できた。現在世界の銀行ランキングをみるとトップ 4 が中国の企業となっている。上海のビルにはそれぞれ企業のロゴが書かれていたが多くが銀行や保険の企業でそのランキングにも納得できた。また、メディアで報じられる悪い面として手抜き建築があると思うが、実際に見たり入ったりするとそんなことがないことが分かった。

博物館の戦争の展示には、日本ではあまりなじみのない日付で起こった事件が記載されており、歴史観の違いは自分たちが受けた被害の部分が注目されるものであることが伝わり、相手の立場にたつには相手の場所での取り上げたもので学習する必要があると感じた。

山西省では、様々な観光地を巡った。イメージの中では、どちらかというと大陸のいい意味でも悪い意味でも主張の強い感じが前面に出ているものだと思っていた。もちろん、日本に比べて主張の強さは感じたが、交流の時など同じアジア圏の文化の中で育った価値観や雰囲気が感じられた。

総じて、一つ目の価値観の変化ということについては大きく変わったように思う。自分の中で、中国という存在が身近になった。この先も中国語をより勉強したいと思った。いつかは中国語でその歴史書などを読んでみたい。

次に二つ目の実物を見るということについて述べていきたい。

志望動機書のなかにも記載したが、わたしが興味を持った理由の一つに中学や高校で習った漢詩の文章がある。今回、よく黄河や黄鶴楼については尋ねることはできなかった。しかし万里の長城や平遥古城にはいくことができた。漢文の授業の中で「城」という字は街を表すと習った。この意味は当時の私にはよくわからず、漫然と暗記していた。それが今回実際に平遥古城を訪れることで城壁に囲まれた一つの町が城として表現されていたことが実感できた。

二つの目標はそれぞれある程度達成できたと思う。しかしながら、今回見たものはあくまで招待されて見せてもらった受動的なものが多かったように思う。今回行ってみてもう少し学びたいと思ったこの気持ちを忘れず、次回は自分で計画を立ててもう一度行ってみたい。